

氏名(国籍)	李圭鈺(韓国)
学位の種類	博士(デザイン学)
学位記番号	博甲第1,759号
学位授与年月日	平成9年7月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	電子映像の造形性 —意識の拡張と映像メディアの研究—
主査	筑波大学教授 三田村 峻 右
副査	筑波大学教授 三ツ井 秀 樹
副査	筑波大学教授 工学博士 富江 伸 治
副査	京都造形芸術大学教授 松本 俊 夫

論文の内容の要旨

本論文は、映像芸術の中でも、特に電子メディアによる造形性に焦点を合わせて、それが人間の意識にどのような変容をもたらしつつあるかについて論じた研究である。

その内容は、序章に次いで本文8章によって構成され、他に資料編として年表「20世紀映像メディア総合史」が付された300余頁(400字詰原稿用紙およそ500枚相当)から成っている。

まず問題提起として、1)映像による表現が芸術として成り立ちえるのか、2)テクノロジーによって人間の感覚・意識が変容するのか、3)映像芸術にどんなコミュニケーション理論が潜んでいるのか、4)人間の身体と意識を拡張する実験的映像とは何か、が挙げられている。

序章では、本論執筆の動機となった今日における電子映像の急速な進展を述べ、その映像美学の検討から、メディアによる視覚的拡張が人間意識の拡張をももたらすという著者の論旨を要約している。

第1章「研究の目的と方法」では、本研究の背景として、コミュニケーション・メディアが印刷から電子メディアに移行しつつある文化的転換期にあることを挙げ、テクノロジーを基盤とするこれらの電子メディアが人間の意識にどのような変異をもたらすかについて研究することが本論の目的であると述べている。

第2章「イメージから映像へ」では、まず身体の機能と構造についてこれまでの知見をまとめ、次いで見ること、イメージと映像、映像の造形性について言及して、「イメージ」「画像」「映像」の概念規定を行い、本論展開の基礎固めとしている。

第3章「テクノロジーの進歩と機械芸術」では、テクノロジーの進歩と社会の影響の観点から芸術との関わりを述べ、とくに戦後のアート・アンド・テクノロジーの動向について、時系列に則って検証している。

第4章「実験的映像による新しい視覚の拡張」では、前章を受けて、今世紀前半の機械時代における映像技術について、実験映像における技術革新、光による動的映像の創造、映画の拡張・視覚の拡張と題して、より具体的に検討している。

第5章「電子技術による映像空間の拡張」は、本論の主要な部分であり、今世紀後半に至って普及した電子映像技術である、ビデオによる視覚芸術表現と環境化、デジタル・イメージの拡大、電子映像のサイバネティック性について、分析し次章への布石としている。

第6章「電子メディアによる身体空間の拡張」では、コミュニケーション・メディアの発達、エレクトロニ

クス・ネットワーク・アート及びサテライト・ネットワークによる映像表現へと拡張しつつあることを論じている。

第7章「映像情報環境による意識の拡張と造形表現」では、前章を受けて、身体機能の拡張としての人工生命、映像情報環境と意識の拡張、意識の拡張芸術としてのサイバー・メディアが、電子映像表現のインタラクティブ化を導くとして、事例を挙げながら解説している。

第8章「まとめ」においては、電子映像表現の特性として、第一に映像空間の連続性、第二に映像がもつ現実性と非現実性、第三に時間性を挙げ、テレビ映像では空間が非連続であり同時性と多様性が特色であるのに対し、コンピュータを主とする電子映像メディアではネットワーク化の進展とともに、非対象な映像が作る側の創造力を啓発し、さらには非実体的な内的世界の意識拡張をもたらすと結論付けている。

そして最後に、これまでの要旨を俯瞰して、1) マシン・テクノロジー時代においては視覚の拡張、2) エレクトリック・テクノロジー時代においては空間の拡張、3) エレクトロニクス・テクノロジー時代においては身体機能の拡張、4) 情報・テクノロジー時代においては感覚機能の拡張が進行すると主張している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

現在進行形である電子映像、とりわけコンピュータを中心とするメディア・アートについて論ずることは、ある意味で無謀な冒険と言われるかもしれない。だが、そうした疑念に対して、後ろ向きではなく、より今日的問題を検討することも、新たなデザイン学分野の責務であるということもできるであろう。

本論文は、そうした新たな領域に踏み込み、研究対象として定着させようとした著者の意欲と労力をまず高く評価する。

殊に、数多くの文献資料を渉猟し、詳細な年表を作成したことだけでも今後の研究にとって貴重な資料となるであろう。

ただし、以下の三点についてはやや疑問が残るとするのが正直な感想である。

その第一は、引用例が比較的一般書であって繰り返しが多く、原著あるいは欧文文献からのそれが少ない。そのため、やや概説的であって、専門性に欠けると見なされ易いと危惧される。

第二は、意識と身体をはじめ、あるいは感覚についても具体的な検討に欠ける嫌いがある。このことが、本論をやや抽象的に感じさせ説得性が欠けるのではないかと指摘される。もちろん大層なそれを要求するつもりもないが、出来ることなら、より醒めた視点で、あるいはより批判的な観点からの記述も必要ではなかったかと惜しまれる。このことが、現在進行形の事象に対して楽観的すぎ、逆に将来の視座を失わせるのではないかと考えさせられる。

第三には、さらにこれを引き継いで、本論の主題である「電子映像の造形性」つまり、電子映像時代においてあるいは向かって、果たして「造形性」は保てるのか、に対する筆者の主張が見えにくいという難点が指摘される。もちろん、こうした大課題は、易々と導き出されるものでもあるまいが、いずれも、今後の課題として残したい。

一方、本論の最も高く評価するところは、巻末に置かれた「映像メディアによる意識拡張の流れ」図にある。20世紀初頭のマシン・テクノロジーからエレクトリック、エレクトロニクス・テクノロジーを経て、生命工学に基づく未来映像環境への流れは、やや皮相的と見えないわけではないが、著者の苦心の跡が見られある程度の説得力を持っており、今後の考察の基点となると評価する。

中でも、1920年代からの電化芸術の流れを、光・運動→時間・空間→環境→メディア→マルチメディア→情報→感性への移行と捉え、それぞれに対応させて人間の身体・感覚・意識の変化がもたらされつつあるとする点は納得できる。

また、それに至る過程として、本論の前半で、オルテガの『技術とは何か』から援用して、偶然の技術は本能的技術、職人の技術は道具技術、技術者の技術は映像技術に当たるとし、さらに映像技術を機械的技術と電子的技術に分けて論を進め、第8章2節の視覚・空間・身体・意識の拡張に敷衍させている点は、独自性があり説得力がある。

総体として、今日急速に進展しつつある電子映像芸術について論ずることは、ある意味で予見的な仮説にならざるをえないが、良い意味での冒険的研究成果であると評価できる。

なお、本研究のような場合、資料として文献・図版のみならず、ビデオ・テープあるいはCD-ROMといった映像資料を付すことができれば、より効果的と考える。時代に対応した、論文形式の検討が望まれよう。

以上の観点から、本論文は独自性のある十分な研究の水準に達しており、映像芸術研究の一石として寄与するところが大きいものと認められる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。